

自然に落ち着くところへ

洲 浜 昌 三

不意に白羽の矢が飛んできた。予期しない選考委員の依頼。様々な理由を盾に防戦したが、出席するのは3回の会議のうち「最終回だけ」という言葉に頑強な意志も砕け、盾を下ろしてしまった。

「新人」の条件とは。会員投票数ほどの程度考慮するのか。候補外で優れた詩集があった時の扱い―これは、自分で抱えていた難題だった。

結果的には、7人の自由な議論と投票の過程で、落ち着くべき所へ自然に落ち着き、もやもやした思惑を抱えず、すつきりした気持で「サンライズ出雲」に乗り、12時間後に島根の土を踏んだ。

出席するまでに、メモを書きながら何度も読み、最後に4段階(◎○△無)で印をつけた。最初から一貫して◎をつけたのは『天を吸って』と『鳥をくくる』だった。どちらが決まっても不満はなかったが、一冊となれば前者を推すつもりだった。以下、限られた紙幅で簡潔に感想を記しておきたい。

『天を吸って』―短い連、短い行の中に無駄のない煮詰まった端的な言葉で、情景や思いが表現され、連ごとの発想や視点が新鮮で変化があり多彩で、読む楽しさがあると共に、人の思い、人間らしさ等考えさせられる。分かる言葉と最少表現で詩を高いレベルでまとめる力量に感心するとともに、詩が本来秘めている魅力を示してもらった気がした。

『鳥をつくる』―平明な言葉で流れるように情景や状況が描写されるが、ふと胸を衝かれたり、予期しない風景や大きな世界が見えてきたり、立ち止まって歩んだ道を振り返ったりする。詩想、思考に深みと広がりがあり、それを抑えて静かに何気なく表現するところに経験の豊かさを感じた。

『約束』―飾らず真っ直ぐ自己と周囲を見つめて生まれてくる痛みや悲しみはダイレクトに心を打つ。詩が魂の救済になっている貴重な詩集。『傍ら

のひと』― 淡々と日常の出来事が静かな安定した目線から描写される。表現やことばに香りや品があり、魅力的。『微かな吐息につつまれて』― 言葉が豊かに繁っていて面白いが、逆にいえばテーマが繁みに隠れて見えにくい。『世界の終りの日』― 独特な視点と細かい描写が特徴だが、その先に見えるてくる世界が濃厚な散文的描写に霞むきらいがある。『ひかりへ』― 自由奔放な表現が新鮮だった。

本文 23行×41行 || 943字